

ののあおやま

青山の中心で 森の息吹を感じる 生き物たちのオアシス

表参道駅と外苑前駅のちょうど真ん中あたり、青山通り沿いから北側に一本奥に入った場所に広がる「ののあやま」は、令和2年(2020)5月に新設された複合市街地です。「ののもり」と名付けられた敷地内の緑地空間には、ビオトープや芝生広場が整備され、一歩足を踏み入ると、小川のせせらぎや鳥のさえずりが聞こえてきて、まるで本物の森の中にあるような感覚に包まれます。「ののあやま」運営会社・株式会社たりたり代表の水野成美さんにお話をうかがいました。

「ののもり」は、かつて大名屋敷のあった高台の地形や水脈をよみがえらせる形で作られています。多様な生き物が持続的に生息できる豊かな環境の中で、約180種の草木が四季折々に多彩な表情を見せてくれます。

春にはヤマザクラが開花し、優雅で可憐なシャクナゲや、黄金色に輝くヤマブキ、その名のとおりイカリ型のユニークな花を咲かせるイカリソウ、甘い香りを振りまきイセナなどの花木たちが、寒い冬の終わりを知らせます。そして、その花の甘い香りに誘われてアゲハやツマグロヒョウモン、モンシロチョウ、キムネクマバチやセイヨウミツバチたちが吸蜜にやってきます。

白いお腹に黒いネクタイ模様が特徴的なシジュウカラ、幸運を呼ぶ鳥と言われているツバメやヒヨドリ、美しい緑色の体に目の周りを縁取るような白い輪が特徴的なメジロたちも春の訪れを告げて来てくれるかもしれません。「ののあやま」には、珍しい渡り鳥たちが立ち寄り寄ることもあるそうです。小さな鳴き声に耳を傾けて探してみると、思わぬ大発見があるかもしれません。

昨年の夏には、東京都(区部)の絶滅危惧1類に指定されているヒガシニホントカゲが見つかるなど、非常に珍しい希少種も生息していることが確認されています。

芝生広場にはベンチが設置されているので、休憩しながら、ゆっくりと自然を鑑賞することもできます。おしゃれなカフェも併設され、天気の良い日のお散歩にもぴったりのスポットです。自然の心地良い風が吹く「ののあやま」で、一緒に春を見つけてみませんか。



敷地内で見つかった、絶滅危惧1類のヒガシニホントカゲ



メジロ



緑地内に整備されたビオトープ。水の中には入れませんが、木製のデッキから生き物たちを観察することができます



「ののあやま」は、都営住宅団地である青山北町アパートの再開発のひとつとして生まれました



森の中の「ぶたい」では音楽イベントも開催され、地域に開かれた場所になっています



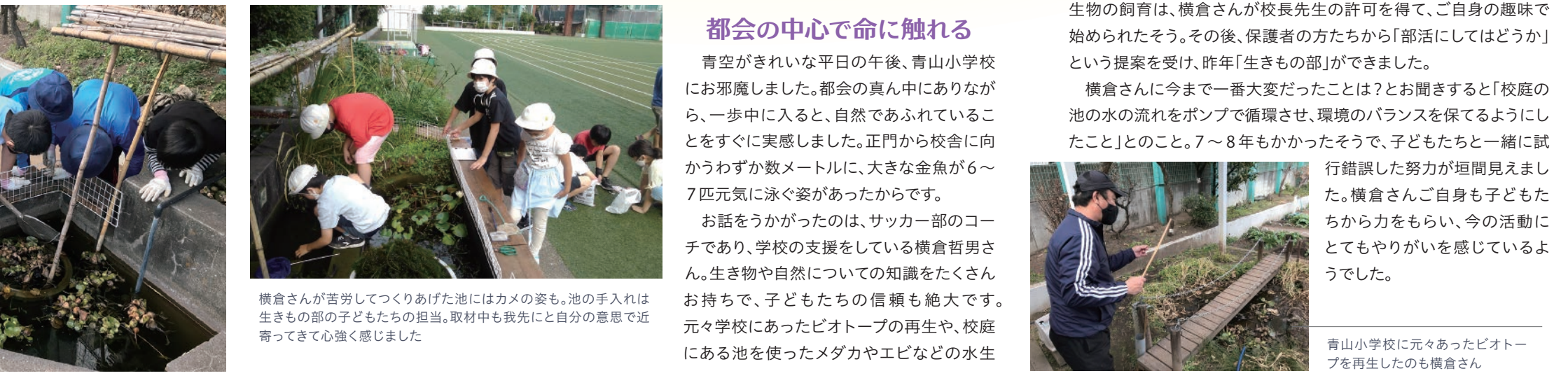
渡り途中のママチャジナイ(ツグミの仲間)も見つかりました



生き物たちの棲むまちへ

ののあやま

青山小学校 生きもの部



横倉さんが苦労してつくあげた池にはカメの姿も。池の手入れは生きもの部の子どもたちの担当。取材中も我先にと自分の意思で近寄ってきて心強く感じました

みつばちあ ~赤坂Bee Townプロジェクト~

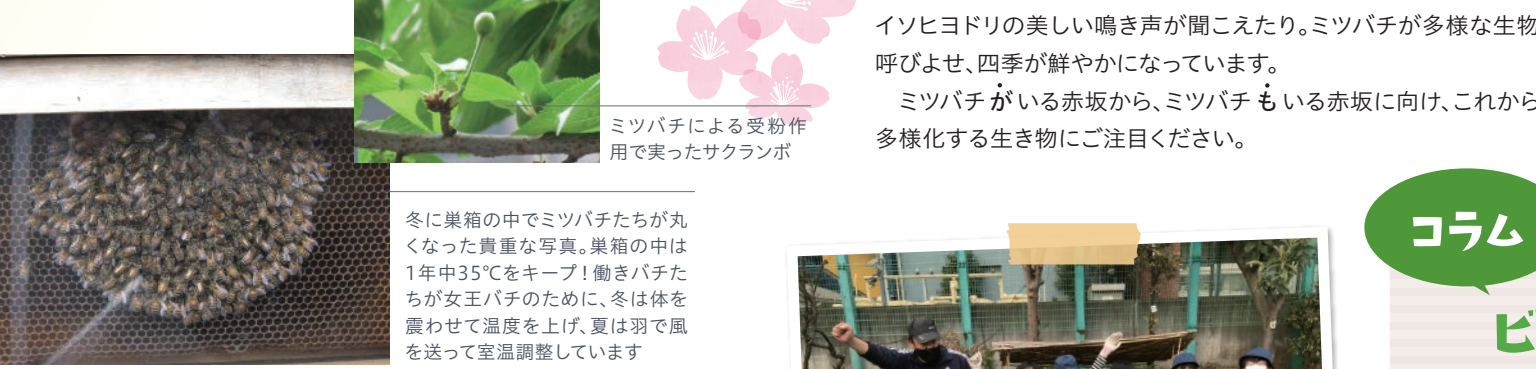
三密避けて、ミツバチとハチミツを探してみよう

赤坂TBSの本社8階屋上で、6群のセイヨウミツバチを生産する“みつばちあ”プロジェクト。平成23年(2021)4月にスタートし、今春で丸10年を迎えるこの企画の創設者であり、主幹されているTBS CSR推進部の高橋進さんにお話をうかがいました。

高橋さんは環境活動に揺り動かしたのは、平成19年(2007)にノーベル平和賞を受賞したアル・ゴア元米副大統領の講演や、名古屋で開かれたCOP10(生物多様性条約会議)への取材がきっかけだったそう。そして、すでにパリで始まっていた都市養蜂による環境活動を知り、“みつばちあ”をスタートしました。

ミツバチが住める場所は人も安心して過ごせる場所

ミツバチの活動範囲は半径約2km。皇居や赤坂の氷川神社、青山霊園、区内の街路樹などから花蜜や花粉を集めます。緑豊かで、農業の心配もいらないこの地域だからこそ、安全で安心なハチミツが採れるそうです。



ミツバチによる受粉作用で実ったサクランボ

冬に巣箱の中でミツバチたちが丸くなった貴重な写真。巣箱の中には1年中35℃をキープ!働きバチたちが女王バチのために、冬は体を震わせて温度を上げ、夏は羽で風を送って室温調整しています

小さな「生き物」が与える大きな「経験」

取材中、人気のカメにはお茶や炭酸飲料などの飲み物の名前を付けていることや、在来種や外来種の違いや特徴などを詳しく教えてくれる子どもたちがいました。自然の生き物や植物と触れ合うことで、子どもたちがイキイキと楽しそうにしている姿は誇らしく見えました。今回の取材を通して、「命について学べる環境」が子どもたちの身近にあり、その中で一人ひとりが真剣に小さな生き物＝命と向き合っていることがわかりました。そして、都会の中心にもたくさんの「生き物」がいるということを知りました。このような自然と触れ合える環境は、大人には小さくても、子どもたちにとっては成長過程で大切な経験になるのだらうと思いました。

青山小学校に元々あったビオトープを再生したのも横倉さん



味見した3種類のハチミツ



地域の小学校の社会科見学会は、いつも大好評!

コラム

ビオトープが「つなぐ」人・街・文化「土地の記憶プロジェクト」から10年を経て

10年前から、青山周辺で「土地の記憶プロジェクト」に取り組む、青山一・二丁目目栄会の市川博一さんにお話をうかがいました。「企業や複合商業ビルが立ち並ぶ青山通りは、“都会すぎて商店街の風情がない”というのが悩みでした。この問題についてあらゆる角度から考察し、この土地本来の生態系に配慮した自然環境をよみがえらせる、ビオトープ(bio:命+topos:場所)を造ることに引き着きました。環境は人の暮らしをつくり、文化をつくれます。青山の自然環境を再生することでその土地の暮らしのあり方をつくる、まちの活動にもぴったりだと考えました」

青山は武蔵野の端にあたり、昔は水場の多い場所。都会から失われた“浅瀬の水辺”をイメージしたビオトープを展開すると、環境教育の一環で造った青山小学校や青山高校の水場に、カエルやトンボが集まってきたのです。そして卵を産み、生命の営みを間近に見ることができるようになりました。

10年が経ち、そうした取組は、「青山小学校生きもの部」や「ののあやま」にも引き継がれています。土地の記憶を呼び起こすプロジェクトは青山の地に根付いてきているのです。

●歌川広重の浮世絵:「名所江戸百景 紀の国坂赤坂池遺景」。水辺が多いことが広重の浮世絵からも見て取れる

東京都立中央図書館特別文庫室所蔵